

## 大阪湾奥の淀川・十三干潟で「ミナミテナガエビ」を採取・確認

河田航路（ひとはく地域研究員/認定NPO 法人シニア自然大学校）

### はじめに

認定NPO法人シニア自然大学校水生生物科が実施した大阪湾奥・十三干潟で定例水生生物において、「ミナミテナガエビ」*M. formosense* (BATE, 1868) (林 健一 2000) を採取・確認することができ、兵庫県立人と自然の博物館へ寄贈を予定している標本に関する知見について報告する。

「ミナミテナガエビ」の生息状況は、兵庫県・瀬戸内海側では、淡路島南部の太平洋岸の河川（増田 修 兵庫の川の生き物図鑑 2011）並びに加古川下流域での生息（土井 敏男ほか 2009）が報告されているに過ぎない。また、大阪府下においては「大阪府レッドリスト 2014」に「ヒラテテナガエビ」が「準絶滅危惧 (NT)」として記載されているのみで「ミナミテナガエビ」の記載は無い。

認定NPO法人シニア自然大学校水生生物科が実施した過去の定点調査において、大阪府南部の男里川並びに番川での採取実績（河田 航路 未発表）がある。また、直近の情報としては貝塚市立自然遊学館が行った調査において、大阪府南部の男里川並びに貝塚市・近木川河口及び二色の浜埋立地内・下水処理場の水路で「ミナミテナガエビ」並びに「ヒラテテナガエビ」の採取記録（山田浩二 2013）（山田 浩二ほか 2016）が報告されており、分布域の北上が確認されている。

### 調査方法

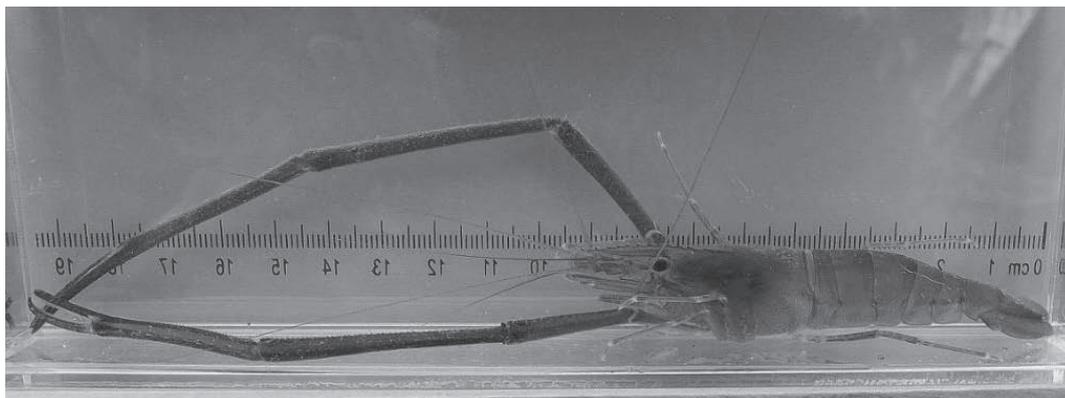
認定NPO法人シニア自然大学校水生生物科には20名が所属し、週1回程度の頻度で琵琶湖・淀川水系を中心として、大阪府、兵庫県、京都府、滋賀県の各河川の上流域、中流域、下流域（汽水域を含む）にて定点調査を行っている。今回の調査は、大阪市淀川区を流れる淀川右岸側（淀川河川公園・十三野草地区（通称）十三干潟）にて、2017年06月23日に科員12名が参加し実施した。調査方法は主にワンド並びに水路ではタモ網を用い、また、本流では投網も併用した。

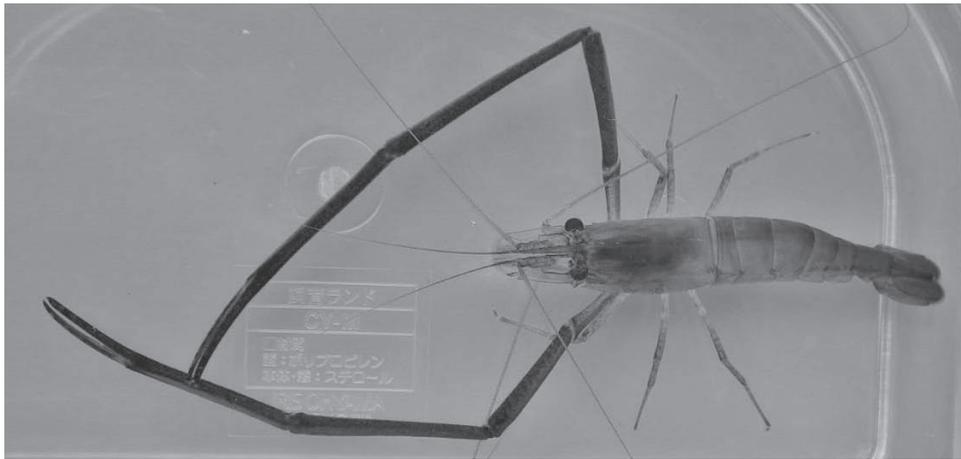
当日採取された汽水域の魚類と共に多数採取されていた「テナガエビ」の中に「ミナミテナガエビ」の成体1匹の採集・確認ができた。

採集した個体は、自宅に持ち帰り時間を掛け写真撮影をした後、再確認のための液浸標本を作製した。筆者らは、劇物指定されているホルマリンの入手が困難なため、消毒用エタノール（76.9～81.4%）を使用して固定した。種の同定には、甲殻類の専門家の先生方に意見を求めると共に、誠文堂新光社刊 豊田 幸詩/関 慎太郎著「日本の淡水性 エビ・カニ（日本産淡水性・汽水性甲殻類 102種）」の記述を基本に、手持ちの魚類図鑑等を参考に同定を行い「ミナミテナガエビ」と同定・確認した。

### 結果と考察

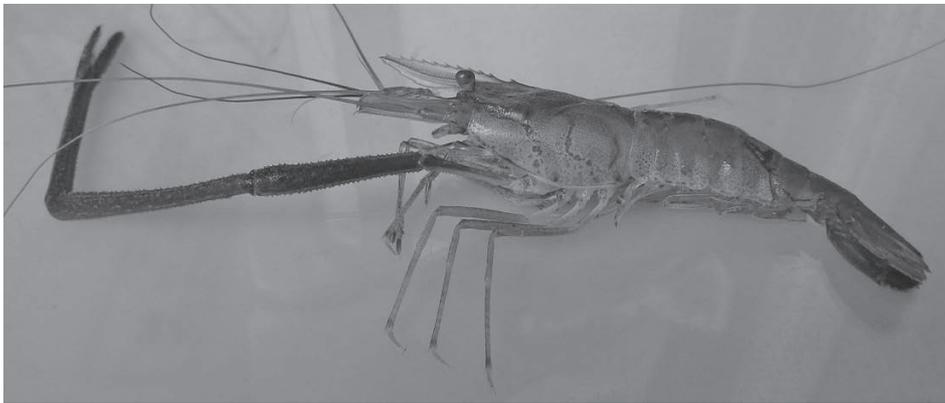
（テナガエビ科・テナガエビ属） 「ミナミテナガエビ（雄）」





体長（眼～尾肢）約75mm強、第2胸脚（ハサミ脚）約130mmの大型サイズであった。参考図書によれば「ミナミテナガエビ」の最大体長は約100mm程度迄と記述されている。

（テナガエビ科・テナガエビ属）「テナガエビ（雄）」

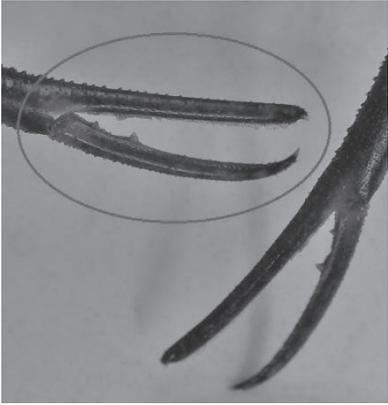


2017/07/23 淀川河川公園事務所主催のイベント「淀川の水辺で遊ぼう」のイベント支援を行ったが、当日の採取生物の中に先に採取した「ミナミテナガエビ」と同程度の大型の「テナガエビ」が混じっていたので「ミナミテナガエビ」との同定比較のために記録写真を撮影し、再確認のための液浸標本とした。今回採取された「テナガエビ」は、参考図書に基づけば「テナガエビ」の最大体長は約86mm程度迄と記述されているので、最大体長と同程度の大きな個体と思われる。

同定のための形質の違いの比較

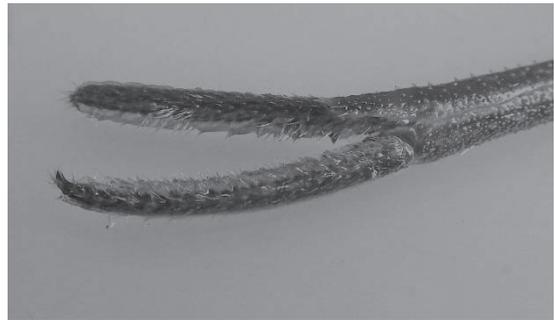
「ミナミテナガエビ」	「テナガエビ」
<p data-bbox="225 1556 464 1585">(頭胸甲側面の模様)</p>  <p data-bbox="225 1928 783 1995">頭胸甲側面に3本の斜横帯があり、前2本の線の縁が明色に縁どられる。</p>	<p data-bbox="815 1556 1054 1585">(頭胸甲側面の模様)</p>  <p data-bbox="815 1928 1374 1995">頭胸甲側面に不明瞭な斜横帯があり、暗色の横縞は無い。</p>

(雄の第2胸脚のハサミに生える毛)



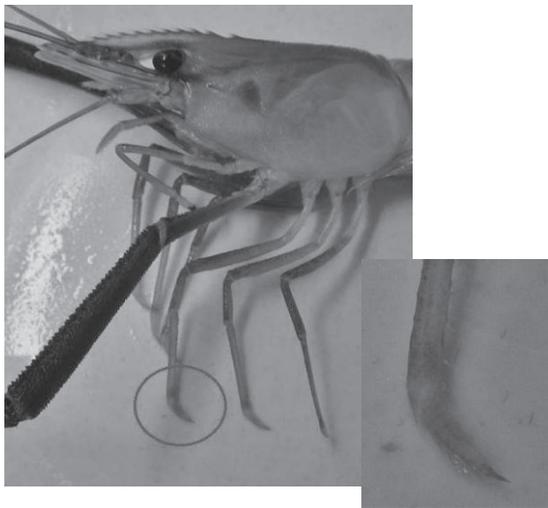
雄の第2胸脚のハサミに剛毛が密に生えていない。

(雄の第2胸脚のハサミに生える毛)



雄の第2胸脚のハサミに剛毛が密に生えている。

(第3胸脚指節の形状)



第3m胸脚指節の形状は短く頑丈

(第3胸脚指節の形状)



第3胸脚指節の形状基部から先端に向かって一様に細くなる

(参考項目)

(肝上棘)



肝上棘は、触角上棘の後方や下側にある。

(参考項目)

(肝上棘)



触角上棘は前縁ではなく、頭胸甲上にあり、先端だけが前縁から出ている。肝上棘はその後方にある。

## あとがき

「ミナミテナガエビ」は、大阪湾南部の男里川並びに番川において、過去の定例調査において多頻度に採取・同定する機会があったので、この経験により現地での同定時に「これは何か違う」と気付くことができたことが一番重要なことであったと思っている。

過去の定例調査において、武庫川・武庫大橋、猪名川（藻川）・上園橋の2地点で、「ヒラテテナガエビ」を採取・確認しているが、今回の淀川での「ミナミテナガエビ」の採取・確認を合わせて考える時、大阪湾には、淡路島南部より淡路島に沿って北上し大阪湾奥の沿岸部に達する潮流があり、両側回遊性テナガエビ属である「ミナミテナガエビ」並びに「ヒラテテナガエビ」2種の生息域から幼生が潮流により大阪湾奥並びに播磨灘方面に運ばれてきて定着していることを示唆していると考えている。（土井 敏男ほか 2009）

特に「テナガエビ」は、兵庫県南部の瀬戸内海並びに大阪湾流入河川・汽水域においては、普遍的に多数が採取されており、個別記録写真の撮影や個別同定は実施していないので、「ミナミテナガエビ」並びに「ヒラテテナガエビ」の生息・確認を見落とししている可能性は否定できない。

大阪湾奥の淀川においても「ヒラテテナガエビ」の生息が予測されるので今後の調査の同定時には、より慎重な同定・確認が必要と考えている。

## 謝辞

採取直後の同定検討において、貝塚市立貝塚自然遊学館 山田 浩二 学芸員においては、「記録写真」を基に種の同定に対し多大な助言を頂戴したことにお礼申し上げます。

## 引用文献

- 増田 修 (2011) 甲殻類. *in* 兵庫陸水研究会 (編)、兵庫の川の生き物図鑑、5～66、2011
- 土井敏男・中務裕子・国居彩子 (2009) ヒラテテナガエビとミナミテナガエビ (テナガエビ科)、南紀生物、52 (2)、146～149、2009
- 大阪生物多様性保全ネットワーク編 大阪府レッドリスト 2014
- 石田 惣・山田 浩二・山西 良平・和田 太一・石田 哲也 (2014) 大阪府の汽水域・砂浜域の無脊椎動物および藻類相. 自然史研究、3 (15) : 237～271
- 山田 浩二 泉州生きもの情報 ヒラテテナガエビ、自然遊学館だより 2013 No. 68 : 16～17
- 山田 浩二・河添 純子 (泉鳥取高校教諭9 (2016) 近木川、男里川におけるミナミテナガエビの記録、自然遊学館だより No. 81、2016 : 2～3
- 林 健一 (2000) 日本産エビ類の分類と生態 (112-114)、海洋と生物 129 (vol. 22 no. 3～5) . 誠文堂新光社刊 豊田 幸詩/関 慎太郎著「日本の淡水性 エビ・カニ (日本産淡水性・汽水性甲殻類 102種)
- 石田 惣・佐久間大輔・初宿 成彦・樽野博幸・中条 武司・波戸岡 清峰・山西 良平・横川 昌史・和田 岳 (2013) 第44回特別展「いきもの いっぱい 大阪湾」解説書「大阪湾本、」5～6